遺跡からのメッセージ（45）

文化遺産を今に活かす⑫ 保護が急がれる峯塚古墳

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

学生たちが発掘をした高松塚古墳

筆者が担当する授業「日本考古学の歩み」は、考古学・民俗学専攻（今年度から考古学・民俗学研究コースに変更）の１年次生の必修科目で、毎年、古墳を扱う回に決まって見てもらうビデオがある。「高松塚古墳の歴史」と題したそのビデオは、飛鳥資料館が館内のビデオコーナーで上映するとともに、DVDの形で一般販売しているもので、高松塚古墳の発掘に参加した人々のエピソードを中心とした壁画発見までの経緯を再現したドキュメンタリーだ。ビデオは、1972年当時、関西大学の２年生として発掘調査に参加した森岡秀人氏が、個人的な日誌として大学ノートに書き綴った綿密な調査記録をもとに、網干善教助教授のもと、学生たちが調査に当たった様子を役者が演じている。盗掘孔の隙間から女子学生が石室の中をのぞき込み、壁画の存在を先生に伝えるシーン、森岡氏がいささか興奮気味に当日の状況を詳細に記したページを紹介するシーンが特に印象的だ。ビデオを見た受講たちは、あの高松塚古墳を学生たちが発掘したことにまず驚き、さらに、自分たちと同年齢に近い学生が記した日誌の水準の高さにも圧倒される。

そこで筆者が受講生たちに話すのは、その頃、つまり1970～80年代にかけての天理大学の学生たちも、高松塚古墳を発掘した関西大学の学生たちと同じように、高い水準で古墳の調査を行っていたということだ。当時はまだ天理大学には歴史文化学科が設けられていなかったが、自主的なクラブ活動として、新しく結成された歴史研究会の学生たちが、顧問の西谷眞治先生、金関恕先生の指導のもと、大学周辺の布留遺跡をはじめ、各地の遺跡の発掘調査に参加したり、古墳の測量調査を自主的に行ったりと、活発に活動していたのだった。

大和の終末期古墳を代表する峯塚古墳

天理図書館の裏側、県道を渡って緩やかな谷あいの野道を東に少し奥に入った山裾にある峯塚古墳は、早くから著名な古墳として知られ、1917年、現地を訪れた考古学者の梅原末治氏が、墳丘や石室の詳細な観察を行い、略測図を示しながら、「壮麗なる横穴式石室を有する丸塚の代表的遺蹟」として、日本の代表的古墳の一つに位置づけ、当局の適当な保存措置が望まれると記している。時が流れ、1970～71年、活動を開始した歴史研究会の学生たちが、まず最初の測量調査の対象としたのが、この峯塚古墳だった。学生たちが作成した墳丘の測量図や石室の実測図は非常に精密なもので、その後、学界の基礎資料として多くの研究者に利用されるとともに、2009年、古墳からやや離れた道沿いに天理市教育委員会が設置した説明板（写真１）でも、クレジットを添えて、その図面が示されている。

写真１　峯塚古墳の説明板

図面によれば、墳丘の北側には山塊が迫り、南側は古墳の墳丘の輪郭に沿って丸くめぐるような平坦面が存在することが見て取れる。これは、飛鳥地域の終末期古墳と共通する特徴で、墳丘の築造に先立って、山裾を円形にえぐり、大規模な墓域の造成がなされたことが推察される。平坦面（墓域）の規模は、東西幅約60ｍ程に及んでいる。墳丘は、３段築成の円墳で、直径35.5ｍ（下段）という数字が報告されている。墳頂までの比高は約8.5m。墳丘は、裾近くでは約45度の急傾斜で腰高に盛り上がり、墳頂部は丸く平坦面が見られない。墳丘の斜面には、凝灰岩質砂岩（いわゆる天理砂岩）を用いた切石の葺き石が全面に貼り巡られている。両袖式の横穴式石室が南側に開口し、石室の全長は11.11m。玄室は長さ4.46m。石材は表面を平滑に加工した花崗岩切石を用い、奥壁と両側壁は２段に積まれ、天井石は２枚になっている。切石の目地には漆喰が使用されている。羨道（せんどう）は長さ6.65mで、側壁の羨門部近くは切石が２段積みになっている。

やや専門的に言えば、丁寧に加工した切石を用いた峯塚古墳の石室は、７世紀前半から中頃に位置づけられる「岩屋山式石室」と呼ばれるものだ。「岩屋山式石室」を持つ終末期古墳は他にも類例があるが、その多くは、国指定の史跡クラスの重要かつ著名な古墳で、たとえば、昨秋の学外授業でも訪れた飛鳥の岩屋山古墳は、国の史跡に指定されて墳丘が整備され、また、安倍文殊院西古墳は国の特別史跡に指定されている。その中で、墳丘の全面に切石の葺き石が貼られている峯塚古墳は、希有な事例であり、他に比類のない重要な古墳であることを示している。

古墳とその周辺の景観の変遷を確認すると、明治年間には古墳の墳丘上には雑木が繁茂し、墳丘南側は水田だったことが絵図や文書に記録されている。大正年間の梅原氏による調査時も、戦後すぐの米軍撮影写真でも同様の土地利用状況になっている。歴史研究会が測量調査を行った1970年代初頭は、墳丘上は樫などの常緑樹で覆われ、墳丘の東西と南側は水田だった。1988年頃の写真では、墳丘上段を残して、竹などの樹木が伐採され、南側に開口した石室開口部を遠くから望むことができる。ところが1991年になると、墳丘上は北側の丘陵から竹が侵入し、それにより、墳丘上段に葺かれた切石が多数落下し、かつて水田だった墳丘の東西と南側の平坦地は畑に変わっていたという。現在は、墳丘上の竹林はますます繁茂し、地下茎が墳丘の葺き石を痛め続けている（写真２）。竹の密林に覆われた墳丘は、離れた場所からは望むこともできず、意識をしなければ、その存在さえもわからない。峯塚古墳に関しては、筆者を含め、現地を訪れる人の多くが、墳丘のたたずまいと切石の壮大な横穴式石室に感動すると同時に、竹の密林と化している古墳の現状を残念に思い、何らかの保護的措置が急務であることを実感するのではないだろうか。

写真２　竹の密林と化した墳丘の近況